～ 子供に関わるすべての人へ ～
家庭教育ニュースレター

家族の絆

2019 年 春 ＝ Vol.56 ＝

Contents

● 「笑顔で子育て　～子供の成長を喜びに～」
● 「多様性のなかで埋没しない力を学ぶ」講演会レポート
● 西宮市立図書館から本の紹介！
● ５つの実践目標リレーコラム「身に付けてあげたい“力”（チカラ）」
● 西宮市子育てアプリ「みやハグ」のご案内
● 教職員が子供たちと向き合う教育環境づくりのために

発行／西宮市教育委員会　問合せ先／社会教育課 TEL0798-35-3868

「笑顔で子育て ～子供の成長を喜びに～」

春は、子供の進級や進学のシーズンです。夢や希望をもって新たな環境へ一歩を踏み出し、少し経った時期の子供への関わりについて、紹介をさせていただきます。

まず、大切にして欲しいのは「子供の変化への気づき」です。多くの子供たちは、期待と不安を抱き、緊張しながら頑張っています。朝、家を出るときや帰宅したときの様子や声、夕食時の会話などから子供の変化に気づき、その良し悪しを見極めてください。良い変化であればすぐに声をかけ、気になる変化であれば少し様子を見て、タイミングを見計らい話を聴いてあげましょう。その際に心がけておいて欲しいのは「子供の話を最後まで聴く」ということです。

子供たちは、頑張りすぎると心のバランスを崩すことがあります。そんな時は誰かに思いを伝えようとします。日々の忙しさのあまりに子供の話を最後まで聴くことが困難な状況になることがあるかもしれませんが、話を途中で遮（さえぎ）ってしまうと子供は消化不良を起こしてしまい、心が不安定のままになってしまいます。保護者の方にも頑張ってほしいポイントです。

次に、「俯瞰的（ふかんてき）な視点を持つこと」です。子供の成長を願っていない親はいません。しかしながら、時として、その思いが強すぎて、子供の失敗やできていないことばかりが気になって指摘してしまうことがあります。「頑張っていない子供はいない。少し頑張り方を間違えただけ」という視点をもち、木の上に立って周りの景色を見渡すように、少しゆったりとした気持ちで子供の成長を見守ってほしいと思います。

親は子供の「良き理解者」であってほしいと願っています。親といえども子供のすべてを把握して理解することは困難です。特に、思春期の子供の気持ちはとても複雑です。様々な人と出会い、いろんな価値観に触れることで自分を見つめ、自立していきます。時には友人関係で悩んだり、学習で躓（つまづ）いたりすることもあります。そんな時には親や先生に相談することで新たな視点を持ち、考える力や困難を乗り越える力をつけていきます。しかし、子供は親に心配をかけまいとして相談を躊躇（ちゅうちょ）することもあります。日頃から温かい言葉のシャワーをかけてあげておくことが大切です。

いじめ について
ひとりで悩（なや）まないで相談（そうだん）を・・・

西宮市観光キャラクター　みやたん

いじめ相談専用（そうだんせんよう）ダイヤル

0798－33－0077

月～金　9：00～17：30（祝休日・年末年始を除きます）

西宮市教育委員会　学校保健安全課 教育支援課　いじめ相談チーム

西宮市六湛寺町3番1号

最後にお願いしたいのは「子育てを楽しむこと」です。子供の成長は思った以上に早いものです。つい、きょうだいや近所の子供と比較して、焦（あせ）ったり苛立（いらだ）ったりすることがあるかもしれませんが、つらい時こそ笑顔で子供と向き合い、周囲の協力を得ながら子育てを楽しんで子供の成長を喜んでほしいと願っています。それが親の特権ですから。

悩（なや）みや困（こま）りごと・・・
何（なに）かあったら
相談（そうだん）してね！

西宮市観光キャラクター　みやたん

18歳（さい）までの子供（こども）の発達（はったつ）や学校生活（がっこうせいかつ）について
こども未来センター　電話相談
0798－65－1881

ストレス・不眠（ふみん）など心（こころ）の悩（なや）み・ひきこもりについて
西宮こころのケア相談
0798－35－5066

若者（わかもの）の就労（しゅうろう）や働（はたら）くことについて
西宮若者サポートステーション
0798－31－5951

非行問題（ひこうもんだい）・交友関係（こうゆうかんけい）について
西宮少年サポートセンター
0798－35－3875

（学校保健安全課）

「多様性のなかで埋没しない力を学ぶ」

子供たちは将来、言葉や文化、そして価値観も違う人たちと対話していく能力を身につけることが求められてきます。平成30年度家庭教育講演会では、京都大学総合博物館准教授　塩瀬隆之さんに、親として今できる、子供との関わり方についてお話いただきました。

世の中は多様性で満ちあふれている

グローバル人材の育成が声高に叫ばれるものの、「グローバル人材がどのような人か」という定義は明確でない。目をつぶって「グローバル人材とは誰のことか？」と思い浮かべても、いまだに「グローバル化≒欧米化」という旧態依然とした先入観から抜け出せない世代もいる。5億人が世界経済を引っ張っていると思い込んでいた時代はすでに過ぎ去った。70億人地球を一つの交流圏ととらえるとき、経済的な発言力を急速に増す多様な国々の存在が視野に入らないままでは、どんな理屈も砂上の楼閣として崩れ去りかねない。

学校で社会の時間に習った三大宗教、四大宗教といった知識は、教科書の中でただ語彙として知っていることと、実社会の生活で触れることには大きな差がある。実際に3分の1の人口にも達するとされるイスラム教徒の存在は、街中に増え始めたハラル食のレストランに通う若者の方が詳しいかも知れない。コンビニエンスストアやファーストフードのアルバイト店員に日本人の大学生の姿が見えなくなってきたことも、実感の一つか。その後に増えた韓国や中国から来た若者も、タイやベトナム、インドから来た若者も、丁寧な日本語で応対してくれる姿を見ると、日本の若者は一体どこでアルバイトをしているのか。言葉も価値観も文化も違う人たちと、一緒に働くかもしれない社会はすでに現実となっている。

子供たちが向き合う社会も変化している

現在の学校教育現場には、「グローバル」、「プログラミング」に「アクティブラーニング」、とたくさんのカタカナ語が飛び交っている。さらにこれまで熱意をあてにしただけの長時間労働の見直しが加わり、働き方を見直す前に時間の削減だけが進んでしまって、かえって身動きがとりにくくなったことを嘆く先生もいる。大人も正直になるときかも知れない。

学校だけに教育を押し付けていては教師が困る。家庭教育と言われても、どうしてよいか親も戸惑う。社会教育といっても、地域全体として結局のところ誰が責任をもって学びの環境を整備するのか分からない。大人がその責任を押し付け合っている間にも、子どもたちは成長していく。子どもたちが向き合う社会の変化も止まらない。

新しい社会は多様化している

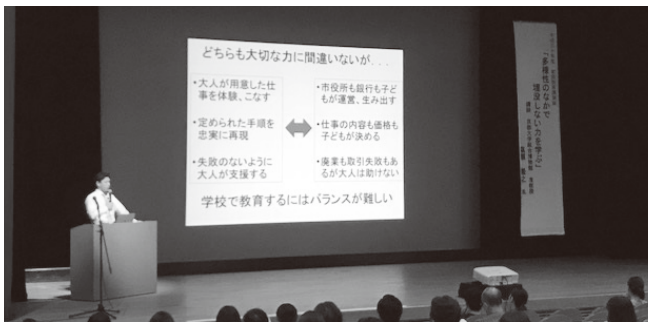
今の社会システムは、高度経済成長まっただ中、1960年代の日本社会の幻影が尾を引いている。そのときの「豊かさ」を前提とした社会制度づくりや、その噂話を耳にした世代の人生観は、ちょっとやそっとでは変わらない。「結婚して、出産して、添い遂げる」という人生は、1950年代生まれの81%が経験したとされるが、1980年代生まれには58%しかいないという。「正社員になり定年まで勤めあげる」というキャリアパスは、1950年代生まれで34%、1980年代生まれで27%、と実は多くの世代において代表事例だとする考えすら、ただの思い込みであったのかも知れない。

人の一生を追体験するようなボードゲームにおいては、小中高大を卒業して就職、停年退職後に老後という昭和のキャリアパスが色濃く反映していた。車のコマに赤と青の人型スティックを載せて「結婚」、一人か二人の子どもスティックを載せて「家族」と呼んでいた。新しい人生ゲームにおいては、LGBTはどのように表現されるのであろうか。

働きながら学びなおす経路は盤面上にどのように複雑なキャリアパスとして描かれるのだろうか。副業で、二枚目三枚目の名刺をもつ場合、手持ちの職業カードも複数にすればよいのか。銀行係はもはやお金を数えて両替だけをする仕事でいいのだろうか。いまの社会をボードゲームとして表現するならば、20年前や40年前とは相当異なる盤面になることは容易に想像がつく。もはやルーレットで大きい数を出すだけが、ゲームに勝つための強さの証にはならないであろう。

なぜ多様性が必要か

昨今注目を集めている※国際バカロレアの導入も、子どもたちにとってはチャンスでもあり、場合によっ



て、問題はより深刻化する。もともと、スイスで国連組織がたくさん設置されていることから、周囲の公設小学校ではただただ教室を一つつくるだけで、20か国くらいの国籍の子が混じるという。国際バカロレアとは、その多様な文化、能力の子どもたちが集まった混沌に生まれた一筋の光であった。しかるに、「なぜ多様性が必要か」を問う必要はない。

他方で、日本においては「なぜグローバル化か」「なぜ多様性が必要か」を語らなければならない背景には、その事実に目を伏せることで乗り切れる社会が色濃く残っているからである。本当に加速する多様化を肌身で感じる世代と、目をつぶってやり過ごせると思っている世代との思考の相違である。

子供の好奇心を信じ抜く

どんな構えが必要かについて、大人は答えを持ち合わせていない。その中で、子どもたちが身につけるべき作法や能力について、その教育責任を学校現場にだけ押し付けるのはおかしい。一見すると大人には八方塞がりに見えるこの社会も、子どもたちの目にはそれほど悲観する姿としては映ってはいない。

大人が子どもだった頃に思い描いていたように、子どもたちにはもっと能天気に明るい社会が描けている。この能天気さは実は大切で、将来にわたっての希望的自信が目の前に立ちはだかる困難を乗り越える最大の力の源となる。**「多様性のなかで埋没しない力」**、それは**子ども自身の内側から生まれてくる好奇心や興味、関心そのものを自分自身で認める力**である。大人や他の誰かに評価されるのを待つのではなく、自らが自分自身で認められる力である。自らの学びを誰かに評価されるのではなく、自ら深め、自ら広げる時間を日常の中にどれだけもてるかが重要である。

大人がまず考えるべきこと

振り返れば学校教育において、そのような時間はどれだけもてているのか。もしそれが不足するとしたとき、家庭教育や社会教育はそのような自ら考え、深める時間を用意できているのか。大人がまず考えるべきは、この3つの教育のあり方そのものではないか。

このような今の子どもに必要な学びを、大人が立ち止まって考える時間を1時間でも、1日でもまずはもってみたい。たとえばこの記事を読んだ日の夜、その1時間をご家庭でぜひ。

※スイスジュネーブに本部を置く国際バカロレア機構が提供する、多様な文化を尊重し、グローバルに活躍する人材を育成することを目的とした教育プログラム。

しおせ　たかゆき
塩瀬　隆之

京都大学総合博物館准教授

インクルーシブデザイン、コミュニケーションデザインなどの研究に従事。共著書に『科学技術 X の謎』『インクルーシブデザイン』など。日本科学未来館“おや？”っこひろば 総合監修者。NHK　E テレ「カガクノミカタ」番組制作委員。平成 27、28 年中央教育審議会初等中等教育分科会専門委員。

西宮市立図書館から本の紹介！

図書館には、毎日たくさんの子供たちがやって来ます。年齢や好きな本も様々です。

どの子供にとっても、読書は言葉や表現力、想像力を豊かにして健やかな成長に役立ち、身についた読書習慣は、生涯にわたって読書を楽しみ、学び続ける力になると考えます。また、家庭での保護者の働きかけや読書をする姿を見せることも大切です。

しかし、お子さんにどんな本を選んだらいいのか悩む保護者の方もいらっしゃるでしょう。そんな保護者に向けて図書館では、おすすめの本のリストなどを発行しています。また、一人ひとりの好みにあった本選びのお手伝いもさせていただきますので、職員に気軽にお声かけください。

ほかにも図書館では子供が本に接する機会として、絵本の読み聞かせを行うおはなし会や様々な行事も開催していますので、ぜひご参加ください。なお、行事の詳細については、図書館ホームページアドレスなどでご確認ください。(図書館HPアドレス：https://tosho.nishi.or.jp/)

さて、今回ご紹介する本は

『ピンクがすきってきめないで』　ナタリー・オンス 文
イリヤ・グリーン 絵、ときありえ 訳、講談社出版

女の子だけどわたしはピンクではなく黒が好き。ママはわたしのことを「男の子　顔負けね」といい、パパはわたしのすきなクモやクレーンは男の子のものだという。そこできいてみた。「どうして　女の子は　男の子のものを　すきになっちゃいけなくて　男の子は　女の子のものを　すきになっちゃいけないの」そしたら、「そうなっているから」だって・・・。

ジェンダーや、価値観、決めつけにとらわれず「そんなこと　どうだっていいじゃない」と言い放つ「わたし」ってかっこいい。(北口図書館係長　鎌井　朱美)

思いやりのある西宮っ子を育てる

5つの実践目標 リレーコラム

平成23年に西宮市家庭教育振興市民会議が新たに提唱した家庭教育の「５つの実践目標」をテーマとして、家庭教育振興市民会議の委員や家庭教育関係者などに自身の体験や思いを投稿していただくリレーコラム。

今号は、５つの実践目標の中から「外に出よう　元気に遊んで　友だちいっぱい」をテーマに、「放課後事業課長の中尾 篤也さん」にお話いただきました。

「５つの実践目標」

- 育てよう　優しい心と　がんばる力
- 声かけよう　おはよう　ありがとう　ごめんなさい
- 見守ろう　よその子　我が子　区別なく
- 習慣づけよう　早寝　早起き　朝ごはん
- ➜ 外に出よう　元気に遊んで　友だちいっぱい

身に付けてあげたい“力”（チカラ）

『お子様に身に付けさせたい“力”は何ですか？』と聞かれたら皆さんは、何と答えますか？

「学力」「コミュニケーション能力」「粘り強さ」…etc

将来、子供たちが社会に出て自分の力で生きていくためには、どれも大切な力ですよね。子供たちは、学校やご家庭などのあらゆる場面で、きっと様々な力を日々身に付けていることと思います。

しかしながら、近年、子供たちのコミュニケーション能力の低下や協調性、社会性の欠如を危惧する声をよく耳にします。ＩＴ技術の進歩により便利な社会になってきた一方で、会話をしなくても生活ができる世の中は、子供たちに身に付けてあげたい“力”が逆に身に付け難くなってきているのかも知れません。

現在、市と教育委員会では学校施設等を活用して放課後の遊び場や学びの場を提供する「子供の居場所づくり事業」の拡充を進めています。私はこの事業を進める上で、ただ子供たちが安心して遊べることだけでなく、児童期に必要な育ちにつながる要素を大切にしたいと思っています。既に取り組んでいる学校では、異学年や集団での遊びにつながるように遊び道具の貸出しを行っており、また子供たちを見守る地域の大人たちが必要に応じて声かけをしています。その結果、学年の違う子同士でも上手く遊べる子が増えるなど、様々な成長を見せてくれています。子供たちは遊びや学びに取り組む中で、ケガや喧嘩のほか、時には叱られたり褒められたり様々な失敗や成功体験を通して、いろんな力を身に付けているようです。

放課後は１日の中で僅かな時間かもしれませんが、豊かな遊びや関わり合いを通して、子供たちには、これからも大切な“力”をたくさん身に付けてもらいたいと願っています。

中尾（なかお）　篤也（あつや）

西宮市教育委員会 放課後事業課　課長

○○ みやハグ（西宮市子育てアプリ）○○

“みやハグ”は妊娠期から就学前の子供がいる子育て世代を対象にした子育てに便利なスマートフォン向けアプリです。西宮市での子育てで「知りたい」「欲しい」情報をアプリに集約し、リアルタイムに提供します。

配信される情報は

▽手続きや支援サポートを簡単に検索できる子育てガイド

▽親子で楽しめるイベントやおでかけ情報

▽公園や子供を連れていける施設を検索できるスポットナビ

などです。他にも当直医を検索できたり、予防接種の簡単管理、参加したいイベントをお気に入り登録すれば、通知も受け取れます。ぜひ“みやハグ”をご利用ください。

市のホームページ（トップページ「みやハグ」）に、アプリの使い方やメニュー、ダウンロード方法など詳しく掲載しています。

App Store　Google Play で「みやハグ」と検索してください。

【問合せ】子育て総合センター（0798－39－1521）

教職員が子供たちと向き合う教育環境づくりのために…

教職員が心身ともに健康で子供とじっくり向き合う時間を確保するために、兵庫県教育委員会の推進プランに基づき、勤務時間の適正化に向け、各校園で『教職員定時退勤日』、中学校・高等学校で『ノー部活デー』等を設定しております。保護者、地域の皆さんのご理解をよろしくお願いします。（教育職員課）